

〔「富岡鉄斎と近代日本の中国趣味」展によせて〕

鉄斎のうつした中国書画—模本と粉本—

富岡鉄斎(1836~1924)は、その長い生涯を通じて、伝統的な中華文人の教養を深めるべく努力し続けた画家と言えます。彼が生きたのは、明治維新や辛亥革命を経て、東アジアが近代化に向かう激動の時代です。時代の急激な変化は、国内外における文物や文化人の大移動をうながしました。このうねりの中で、鉄斎はどのような中国絵画と出会、それらをどう見たのでしょうか。

鉄斎は、文人画家について、「古名人ノ真蹟ヲ熟覽ノ余、其真蹟ヲ臨(ミテテウツス)摸(スキウツス)ヲ能クスベシ。臨摸シテ古人ノ画格筆意ヲ研究シ而、其画ノ位置(図ノ取ヤウ)ハ、自己ノ胸中ヨリ組織スベシ。決而他人ノ図ヲ用フベカラズ。一木一石ヲ研究シ、真物ヲ参照シ、造化ヲ手ニ入ルベシ。」(「南画論」『鉄斎研究』40号、1978年)と述べています。明末の高名な文人画家・董其昌の『画禅室隨筆』に見られる画論の影響が濃厚で、鉄斎も、文人画家たるもの、古画を師として臨摸するのが第一、さらに自然に学び、自らの新機軸を出すことが重要であると信じていたことがわかります。では、本展に出陳される鉄斎の模本・粉本からその実践の様相を探って

みましょう。

最初にご紹介するのは、現在藤田美術館所蔵の「天池石壁図」です。元末四大家の一人・黄公望の作品で、複雑に積み重なる山容の緻密な描写が見所です。明から清にかけてよく知られた名画で、コピーや模倣作品も数多く作られました。董其昌は「吾れ黄子久(公望)の天池図を見るに、皆な贋本なり。」(『画禅室隨筆』)との言葉を残しています。現在、北京と台北の故宮博物院に、藤田美術館本とほぼ同じ図様の「天池石壁図」が所蔵されています。また、清を代表する画家・呉歴の「倣黄公望天池石壁図」は墨の意匠に使われ、デザイン集である汪近聖『汪氏墨戲』(1792年)の挿図としても広く普及しました。

藤田本は、江戸時代には奈良県多武峰談山神社に伝来し、彭城百川・高芙蓉・円山応挙・野呂介石ら、日本南画家たちの激賞を受けていました。中でも介石の惚れ込みようは、生涯に11もの臨本を作ったという逸話に明らかです(中根淑『香亭雅談』)。維新後、元長州藩士の政治家・鳥尾小弥太の手を経て、藤田傳三郎の所有となりました。鉄斎は談山神社で一度この画を見、藤田家に移った際にも来歴を聞か

れたようで、その後も何度か鑑賞の機会があったと述べています(『絵画清談』7号、1919年)。藤田本には1908年の鉄斎の添帖が付属し、清荒神清澄寺に鉄斎の粉本(図1)が所蔵されています。他の粉本よりも丁寧なうつしで、鉄斎が藤田本を重視していたことがうかがえますが、筆録(『愛日惜時記』)や、『汪氏墨戲』所載の図に倣った作品(1915年)の箱書などには、真筆とすることへの疑念が吐露されています。一方で、鉄斎は介石を池大雅に次ぐ本邦第2の文人画家として高く評価していました(「南画論」)。鉄斎にとって藤田本は、介石を始めとする江戸の南画家たちを顕彰する意味で重要だったとも考えられます。江戸時代の中国画評を継承しつつ、やや距離を置いてそれを歴史的に位置付けようとする、鉄斎の鑑賞態度が興味深い事例です。

鉄斎が模本を作った、清・石涛「東坡時序詩意図冊」(大阪市立美術館)は、近代に入って盛んになった日中交流と清末民国初の動乱を背景に流入してきた、「新たな」中国絵画です。北宋の文人・蘇軾の詩から12ヶ月の変遷に関わるものを選び、書写して、その詩意を絵画化した作品で、清末のコレクターである廉泉・呉芝瑛夫妻の旧蔵でした。廉泉は日本と縁が深く、1914年3月から7月に上野で開催された東京大正博覧会のために来日した際には、上野の美術学校で68件もの書画を展示

しています。この時の「小万柳堂鑑蔵書画展観総目録」に、「東坡時序詩意図冊」も見ることができます。廉泉は売却の交渉にも応じており、同年7月に京都大学教授・内藤湖南の訪問を受け、8月に京都の俵屋で所蔵品24件の展観を開いています。この展観には、鉄斎の子息・謙蔵も参加しています。翌年の夏、湖南は京都大学で、これまでの日本ではあまり知られてこなかった清朝絵画史の講演を行います。このときにも「東坡時序詩意図冊」は参考作品として展示されたようです。1916年に出版された、この講演時の展観図録『清朝書画譜』(博文堂)では、関西の中国書画コレクター・阿部房次郎の所有となっています。1921年には博文堂からコロタイプ複製が出版されるなど、日本にある石涛画として高く評価されてきました。

鉄斎の「模石涛山水画冊」(清荒神清澄寺、図2)は、俵屋での展観の翌月に作られました。余白が多く淡彩の美しい原画の趣を継承しつつ、紙の白さと、墨や色彩の鮮やかさとのコントラストをさらに強めた、鉄斎らしい作品です。12図の図様をそれぞれうつすだけでなく、呉芝瑛の跋も全文を記し、石涛の旧居を描いた1図に、題字「掃塵」、墨拓の石涛像、李斗『揚州画舫録』(1795)に引く石涛伝を合装しています。石涛画と翁方綱の題のみを選ぶコロタイプ複製に比して、来歴や文献などによる画家研究も重視する学者・鉄斎の鑑賞のあり方をうかがうことができます。

本展では、以上2件に加えて、鉄斎とも親交のあった田能村直入が京都画学校に寄付した、清・汪葑「溪山明微図」(京都市立芸術大学芸術資料館)の鉄斎粉本(清荒神清澄寺、図3)を、それぞれ原画とともに展示します。また、潘仁作品のうつしで、当館所蔵の「阿弥陀如来図」の画稿としても用いられた「阿弥陀如来図粉本」(清荒神清澄寺、図4)も出陳します。原画・粉本・模本・本画を見比べながら、近代を生きた鉄斎の文人画家としての営みに思いをはせていただければ幸いです。

(植松瑞希)

図1 天池石壁図粉本



図2 模石涛山水画冊



図3 秋景山水図



図4 阿弥陀如来図粉本

